



軽井沢フューチャーズ
大会会長 **横澤 規佐良**

暑さが日ごと増してまいりましたが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

この度は軽井沢フューチャーズにご支援を頂き、誠に有り難うございました。震災、
原発事故と厳しい状況のなか、大会開催資金が集まるかどうか心配しておりましたが、

財団法人軽井沢会をはじめパトロン、サポーターの皆様方のご協力が必要な資金を調達させて頂くことができました。大会役員を代表いたしまして厚くお礼申し上げます。

大会は雨天による順延もなく順調に試合を消化、日程どおりに決勝を行うことができました。

本年度は日本人参加選手の年齢層が大幅に若返り、かつベスト4を独占、大会開催の趣旨である『国内で男子若手選手にATPポイントを獲得する機会を提供する』という結果となり喜ばしい限りです。

優勝した江原選手は19歳、4強に残った内山選手は18歳、まさに未来『フューチャーズ』に向かって輝かしい一歩を踏み出しました。そしてこの結果に満足することなく、ひとつ上のカテゴリーのチャレンジャー大会、そしてグランドスラム大会へ羽ばたいてくれることと思います。

またお忙しい中、スタンドで応援をいただいたギャラリーの方々、クレーコートのためボールマークの確認などで奔走された審判やラインジャッジの方々、運営に当たられたスタッフの方々、決勝戦のボールパーソンをしていただいたジュニアの皆様方にもお礼申し上げます。

第7回 軽井沢フューチャーズレポート

*はじめに

本年度の国内初戦となった軽井沢フューチャーズは、これからの日本男子テニス界を背負って立つ若手が集まり、大会開催の意義に込めてくれました。日本人によるベスト4独占は、7年前に当大会を立ち上げて以来の快挙です。これも浄財をご寄付いただいたパトロン、サポーターあってこそその成果で、大会役員一同心より御礼申し上げます。以下大会のレポートをお届けいたします。

*シングルス予選



6月4日土曜、予選が始まった。今年は海外からの参加選手が少なく、ITFランキング

を持っている選手はほとんど本戦にダイレクトインできた。ただ一人こぼれたのは小野田賢。唯一のATPポイントは去年のこの大会での1ポイントなので有効期限が切れる今年には「どうしてもデフェンドが必要」な戦い。無事予選を突破したものの、ポイントを獲得するには本戦での1勝が必須条件だ。ひいたドロの対戦相手は佐藤文平、「チャンスはあるだろう」と周囲に励まされるが表情は硬かった。一方予選決勝で敗退しても本戦選手が欠場した場合、繰上げ出場できる制度(ラッキールーザー)を待ったのは亜細亜大学4年の矢野洋。



1回戦が行われる月曜火曜の両日、本部前で朗報を待つ。7日火曜午前9時30分、韓国選手の不出場(ノーショー)が判明し本戦に出場できることになった。相手は畠中将人、軽井沢ではお馴染みのベテランだ。「1ポイント取ることが出来たらテニス人生変わりますから」と矢野の顔に安堵の笑みがこぼれた。結果だけ記すと小野田は4-6、6-7。矢野は2-6、2-6。残念ながらポイント奪

取はならなかった。やはりATPポイントの壁は厳しい。もちろん勝った佐藤、畠中にしても、予選からの選手やラッキールーザーで出場した選手に取りこぼしではランクアップは覚束ない。弱肉強食の世界がそこにはある。

*シングルス本戦



今回の本戦ドロにシードは8本、上位から順に守屋宏記(364)、小ノ澤新(590)、三橋淳(640)、リー・シンハン(台北:666)、関口周一(668)、仁木拓人(671)、江原弘泰(696)、内山靖崇(734)である。カッコ内はATP順位だが、実力差は紙一重。過去の全日本の実績で4強経験者は、守屋、三橋、仁木の3人。今年の軽井沢フューチャーズのドロであれば、優勝者で全日本4強の一角くらいか。テ杯代表の杉田祐一、伊藤竜馬、添田豪が出場した場合、残る一席になるわけで…その上には織織圭という日本のエースもいる。

昨年度は国内で11試合開催された男子フューチャーズトーナメントだが、今年は経済状況の悪化で8試合となり、さらに震災の影響で春先の4試合が中止、開催されるのはわずか4試合になってしまった。したがって、国内フューチャーズトーナメントとしては初戦となる、すでに6月だというのに…

*シングルス準々決勝

1日だけフューチャーズを観戦するのなら、BEST8が出揃った日をお勧めしたい。多くの有力選手を見る事が出来るのと同時に、シビアな試合が目白押しになるからだ。BEST8に入った時点で獲得できるATPポイントは2ポイントにすぎないが、準決勝に進出すれば一気に6ポイントに跳ね上がる。この差は大きい。今回は9日木曜に準々決勝が行われた。注目は3番コート、第1シードの守屋を倒して意気上がる松尾と、注目の新人内山の対決だ。日本人離れ

した体躯から豪打をシバき出す松尾、パワーだけなら世界基準を完全に満たしている。この日も序盤は五分以上に渡り合い才能の片鱗をみせた。しかし、幼少時代から注目され、盛田ファンで4年間アメリカで鍛え上げた内山は落ち着いたもの。パワー勝負でも十分に対抗し松尾のミスを誘うと、試合の流れをつかみ一気に押し切った。勝ち方を知っている18歳は、腹筋痛もあり4強にとどまったが「3年後には100位以内」と意気軒昂だった。敗れた松尾は、ジュニア時代からトップ集団の中で一步伸び悩んでいたが、ここに来て一皮剥けた印象だ。「今回同期の守屋選手に勝てたのは自信になりました。勝負を楽しんで一歩一歩進んで行きたい。精度を磨くことが課題です」と敗れたものの胸を張った。

9番コートでは、三橋と仁木。全日本4強の実績を持つ二人が熱いラリーを展開した。22歳と24歳、実社会では若手でも、世界を目指すとなると「24歳でフューチャーズにはダメ」と仁木は自らを断じる。その思いは三橋とて同じである。彼は一昨年からひとつ上のレベル、チャレンジャートーナメントに予選から出場。結果は厚い壁に跳ね返され、今年はフューチャーズでの再挑戦を余儀なくされている。背水の陣ともいえる両者の思いがコートサイドにも伝わってきた。最後に勝利の女神が微笑んだのは三橋だった。同じころ、隣の7番コートではスコアボードが動かない。軽井沢では常連となった小ノ澤と佐藤が競り合っていた。二人ともこのところ好成績で、順位も上昇中。中堅と呼ばれるジャンルから抜け出すべく、闘志あふれる試合だった。僅差で競り勝ったのは小ノ澤、第2シードの面目を保った。



準々決勝一番の長丁場になったのは1番コート、「去年の札幌の借りを返す」と初の4強入りを目指す江原の前に、



軟式風バックハンドから意表をつくドライブを繰り出すリーが立ちふさがった。走りまくる江原はネットプレーも交えてリーを揺さぶる。ファイナルセットは両者ともケレン

との戦いになった。試合時間は3時間40分「スタミナには自信がある」という江原がなんとか振り切った。リーは試合後、上半身までケレンが来て救急車を呼ぶほどの消耗戦だった。

そんな準々決勝のスタンドに日焼けした男性の姿があった。今大会本戦に5人の選手を送り込んだコーチ、Fテニスアカデミーの藤井正之さんだ。江原、松尾のほかに、ベスト16の喜多元明、予選を勝ち抜いた弟の喜多元明、本戦ダイレクトインを果たした長男の藤井信太。「5人とも小学生のときから、ウチで育った選手です。信太は小学生にもなっていないかな？ 皆、それぞれの道を歩み始めて、結果を出してくれて、育てた甲斐がありました。コーチ冥利につきます」心の底から嬉しそうだった。

*シングルス準決勝



翌日の準決勝でも江原は小ノ澤相手に驚異のディフェンス力を見せつける。「左脚に痛みがあり、ゲームプランニングを立てられず、とにかく1本づつ集中して…」と気持ちでボールを追い、チャンスボールは逃さない。1球では決められなくても、2球、3球と揺さぶり続ける。立ち上がりは余裕を持って対応していた小ノ澤だが、しだいに打ち疲れたボクサーのように戦意を喪失していく。長いファーストセットこそ6-3で小ノ澤が制し

たが、直後に集中の糸が切れたかのようにダブルフォルトを連発。覇気のないプレーでセカンドを捨てると、ファイナルでも闘志が復活することはなかった。

もう一方の山から決勝進出を決めたのは三橋。「4年前、ここに来たときは1ポイントしか持っていませんでした。シードの松井さんに勝って2ポイント目、ステップアップのきっかけになった大会です」当時18歳だった彼もすでに22歳、今回は新妻のクリスティーナさんを同行しての軽井沢入りだ。「入籍したのは去年の10月です。彼女はルーマニア人、遠距離恋愛だったのですが、一緒になったことで旅行も自由になりました。ツアー生活をよくサポートしてくれています」準決勝は前週ガムで敗れた相手、内山を2セットとも逆転しての勝利、気合はみなぎっていた。

*シングルス決勝



今年の決勝はシングルス、ダブルスとも11日土曜に行われた。例年通り、長野県選抜ジュニアチームの少年少女13名がボールパーソンとしておそろいのスタッフTシャツを着てコートに入った。前夜の雨のため、試合開始は13時に延びたが、コート整備は万全。いつものながらコートキーパーの皆さんの努力には頭が下がる。150名を超す観客が集まり、立ち見で首を伸ばして観戦するギャラリーも多数。三橋夫人、クリスティーナさんの顔も当然見える。隣席には江原を見守る加藤純コーチ、連日3時間越えの3セットマッチを続ける江原は左足を気にしている。腹筋も痛いらしい。工藤トレーナーに尋ねると「1週間休めば治るんですけどね。今回は若手が多いので、治療部位が今までとだいぶ違います」とのこと。もちろん三橋とて、163センチの身体で強打を打ち続けている連戦だ。疲れが残っていないわけではない。三橋は定番の黒、江原は赤のゲームシャツでコートに登場した。

雨上がりのコートは遅い、絶対のサービス力を持たない両者だけに、ブレイク合戦になるであろうことは容易に想像できた。この朝、江原のヒッテイングパートナーを勤めた関口周一は「淳さん次第かな」とつぶやく。江原のサービスで試合開始。先攻したのは三橋だった。ストロークの威力で江原を振り回す。江原は転倒するシーンも…パンツは泥だらけになった。4-1で迎えた三橋のサービス、これをキープすればファーストは取ったも同然。しかし拾いまくる江原、ドロップショットをロブで切り返し2ダウンを追いついた。タイブレイクでも似たような展開が続く、攻める三橋と切り返す江原、関口の予想通りの展開だったが、最後、三橋のミスを誘って江原がモノにした。セカンドはワンブレイクを生かし三橋が取り返し、勝負はファイナルセットに。曇り空の隙間から陽射しもこぼれ始めた。二人の息詰るストローク合戦は3時間を越える。

ファイナルセットは、今まで「耐えるテニス」を展開してきた江原が積極的に攻めるシーンが目立つ。今大会の2R、QF、SF、すべて消耗戦に持ち込んで相手をつぶしてきた江原の流れか？「最後の試合だと思うと、痛みも疲れもあまり感じなかった」と江原。タイブレイクでは、余力のすべてを注ぎ込んで、ノータッチエース、パッシングショット、ネットプレーと極限での技術を披露、栄冠とATPポイント18をゲットした。日本人選手の優勝は岩渕聡、近藤大生に続き3人目、二人はある程度実績のある選手だったが、江原の場合はまさにノーマークからの優勝だ。「ベスト4も初め



てだし、まさか優勝できるなんて思っていませんでした。毎試合、走りとおせたのは、シーズンオフに身体を苛め抜いた成果だと思います。加藤コーチの最高位が360位なので、年内にそれを上回って、再来年の全豪予選に掛かれればと…」夢は広がっている。3年前はワイルドカードで出場し、大人に歯が立たなかった少年がここまでやってきた。メンタルはすでに世界基準、「才能は有

限、努力は無限」という言葉が脳裏をよぎる選手だが、似たような条件下で戦う同世代の守屋、関口らと切磋琢磨することで、大きく羽ばたいてくれるだろう。

*ダブルス決勝



ダブルス決勝はリー／佐藤組が、三橋／内山組との接戦を制した。シングルスでの激闘直後の三橋はよく頑張ったが、この日は勝運に恵まれなかった。佐藤はフューチャーズのダブルスで初の戴冠、自身のブログで「やっと優勝しました。何度準優勝に甘んじてきた事でしょう。やっと掴んだ勝利は本当に紙一重で、一進一退の攻防でした。スーパータイブレーク6-9からは本当に『ガ

ムシャラ』で自分のすべき事を全うする為に必死でした。試合中何度リーと言いつつ合ったことでしょうか。『勝ったら俺のお陰、負けたらお前のせい』のスタンスの彼は非常に心強いパートナーです。リーに感謝です」とその喜びを表現した。

*最後に

大会を総括して横澤大会会長は「地震と原発の影響もあり外国勢の来日が少なくなりましたが、結果的には本大会の目的である『日本男子若手選手にATPポイントを獲得する機会を提供する』

という大会開催の趣旨に沿ったものになりました。ベスト8のうち7人が日本人選手、ベスト4独占は7年目にして最高の成績です。今大会は開催も危ぶまれる中、皆さまのご協力で立派に運営することができました。日本人男子テニス界のステップアップに貢献するために、これからも末永く開催してゆきたい」と語った。また来年、最高の季節の軽井沢で、日本人選手の活躍に目を細めたものです。

(文 小島宣明)

祥啓 暑さが増し蝉の声も聞こえるようになってまいりました今日この頃、益々ご健勝のこととお慶び申し上げます。

先日の軽井沢フューチャーズでは数多くのセットボールを頂きまして誠に有り難うございました。軽井沢高校は3年生を含め男女計19名で活動しております。部員数は決して多くありませんが、大会に向け技術と体力をつけるべく、毎日放課後と週末練習に励んでおります。少ない部員から集める部費だけでは年間を通じて十分なボールを購入することが難しいところ、今回このようなご配慮を賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。大切にしっかりと最後まで使用させていただきます。

今後とも宜しくお願い申し上げます。

敬具

長野県軽井沢高等学校
テニス部顧問
青木 裕 士